

報告5「オナーズ・プログラムの可能性—学習時間の確保と学習コミュニティの形成—」

澤 登 秀 雄（創価大学教務部課長）

皆さん、こんにちは。創価大学の教務部の澤登と申します。よろしくお願いします。

本学では2010年4月からオナーズ・プログラムを導入しました。本プログラムをとおして、いかに学生の学習時間を確保するか、また、その学習時間確保のためにいかに学習コミュニティを形成するかといった可能性について現在も取り組んでいます。

（以下スライド併用）

本学はちょうど今年が開学40周年になります。6学部を設置し、三つの建学の精神に基づいてさまざまな政策を展開していますが、この建学の精神をより具体的に解題したミッション・ステートメントを策定し、特に教養を備えた地球市民としての創造的人間を輩出する、問題解決能力のある人材を輩出するということで展開しています。

その具体化として、国際交流の推進、北京事務所開設、多言語語学教育などを行い、アメリカ創価大学も開学しています。現在、完全なセメスター制度を導入し、通常ですと週15回、専門科目の集中講義においては30回の授業、これに加えて定期試験を行うということで、まずは授業回数の確保に取り組んでいます。（スライドNo.2参照）

このオナーズ・プログラム導入の背景としては、一般的にもいわれますように、昨今は学生の学力が多様化し、さまざまな学力層の学生が入ってきています。特に本学では創業者や建学の精神に共鳴した学生も多く入ってきていただいています。場合によっては本学の一般的な偏差値よりもかなり高い学生も来ています。それらの学生に対して、これまでは例えば基礎演習、また、2010年3月にはGPAを卒業要件化した初めての卒業生が出るのですが、そういう制度も導入している関係で、きめ細かなアカデミックアドバイザー制度や学生ポートフォリオ、数学力向上等の多彩な学習支援キャンペーンなどで、主に中位層の学生に対してかなりの時間と労力、またお金も使いながら取り組んできました。一方で、リーダーシップや問題解決能力を有する学生の社会的ニーズも高まるということもあり、上位層を伸ばすオナーズ・プログラムの必要性を数年来、痛感してきました。（スライドNo.3参照）

そこで、約3年間の検討期間を経て、2010年4月にグローバル・シティズンシップ・プログラムを開設しました。基本的には成績上位層を集めて、将来的には国際的企業や海外大学院などを目指す学生を支援するプログラムとなっています。6学部全学部から2段階選抜で30名を選抜しています。4つの入試（公募推薦、創価高校推薦、センター、一般）の合格者の上位者およびエントリーシートで第1次選抜を行い、第2次選抜は小論文、英語ライティング試験、面接、グループディスカッションの総合評価、そして4月の頭には全新入生に対してTOEIC-IPやプレイスメントテストを実施していますので、その得点も加味して最終的に30名を決めています。

とにかく勉強中心の学生生活を創出し、成績優秀層を学問的に徹底的に鍛えて卒業させていくということを一番の目的としたプログラムです。志願者は2010年は294名でした。2011年も、若干減りましたが、ほぼ同数の志願者があり、ちょっと地震の関係でどうなるか心配な面もありますが、3月31日に第2次選抜を予定しています。（スライドNo.4参照）

このプログラムは5つの特徴を持っています。最初の検討段階では、一つの学部にした方がよいのではないか、もしくはこのようなプログラムでいくべきか、かなりの議論がありましたが、最終的には学部横断で多様性を重視しながら、あえてプログラムとしました。科目はチュートリアル8単位、プログラムゼミ8単位、社会システム・ソリューション4単位、特にこれは文系だからこそ数的処理能力をアップさせたいということをねらいとしています。（スライドNo.5参照）

そして GCP 英語で 16 単位、合計 36 単位を設けています。2010 年度入学生に対しては、32 名をレベル別に 2 クラスに分けて、ネイティブ教員により徹底的にすべての授業を英語で行っています。そして、プログラムゼミⅡでいろいろな PBL を通した学習をしていますので、その一つのまとめとして 2010 年度はフィリピンで 2 週間の海外研修を実施しました。

このプログラム修了に必要な単位数は合計 36 単位となっており、通常の各学部の卒業要件単位とは別に設けています。従って授業もほとんど 5 時間目、6 時間目に集中していますので、GCP の学生は夜 7 時 50 分まで授業に取り組んでいます。(スライド No.6 参照)

機構図です。本学の中に学士課程教育機構があり、その中に共通科目運営センターを設けて、その中の一つとしてこのプログラムを設けています。これを私どもの教務第 1 課が事務的には所管しています。この GCP を運用するに当たっては各学部から 1～2 名の教員に出ていただき、現在 19 名の GCP 担当教員が運営に当たっています。検討段階から一緒に検討してきた教職員の方々ですので、何の不平もなくやっていたいっているものと思っています。(スライド No.7 参照)

この GCP の学生専用にゼミ室とラウンジも昨年 3 月に作りました。特にラウンジについては、学生が空いている授業コマや放課後、夜は 9 時までオープンしていますが、とにかく時間があればここに来て勉強するという場になっています。(スライド No.8 参照)

これは授業風景です。幾つかの授業の模様を載せています。(スライド No.9 参照)

先ほども少しふれましたが、今年は 2 月に 2 週間の海外短期研修を行い、キャピトル大学、フィリピン大学、デラサール大学、アジア開発銀行等を訪問しました。この目的はプログラムゼミの仕上げとして現地においてフィールド調査を行うこと、また、それに関する向こうでの英語の授業を受けることで、2 週間、内容のある研修を行ってきました。(スライド No.10 参照)

GCP の学生がどの程度、授業外学習をしているかということですが、このプログラムの開設に当たり、一つの視点としては、まずは教員の側からのしっかりとした課題提示、つまり授業外での学習を想定した授業を行うということを決めていました。例えば英語でいいますと、リスニングとそのノート作成、教材の音読・速読、文章・サマリ作成などがありまして、毎日 4 時間程度を要する難度の高い課題を提示しています。

社会システム・ソリューションでも、英語で数的処理能力の向上を目指した宿題を出しています。

プログラムゼミでもさまざまなレポートを課し、またゼミⅡではグループに分けての PBL を取り込み、リサーチ・ジャーナルを提出した上でさらにグループでしっかりと討議を行ってゼミに臨むということを学生に求めています。

そして、個別によく面倒を見るチュートリアルではそれぞれ課題も出していますが、GCP の授業だけではなく、GCP の学生が所属する学部の専門科目や共通科目の勉学にもしっかり取り組むよう丁寧に指導を行っています。(スライド No.11 参照)

これらの学生に対して、昨年学習時間の調査を行いました。対象は GCP 学生と一般学生です。昨年 11 月末から 12 月中旬までの 2 週間の学習時間を 30 分ごとに記載してもらう、細かなポートフォリオのようなアンケートです。授業外学習時間と、学生間の勉強の上での励ましや相談のできる友人がいるかどうかを中心とした内容で行いました。

(スライド No.12 参照)

その結果として、GCP 学生は 32 名中 26 名、一般学生は基礎データが少々少なかったのですが、53 名の回答がありました。これは余談ですが、当然のことながら本学では全学的に授業アンケートを実施しており、その中で授業外学習時間の質問項目も設けています。これを平成 18 年度の前期のセメスターからずっと集計しており、ちょうどこの後期で 10 セメスター分蓄積してきました。各学部、また共通科目の科目群といったさまざまな切り口で授業外学習時間の推移を把握しています。

また、2008～2010 年の 3 年間は、この授業外学習時間の向上を目指した全学的なキャンペーンを行ってきました。それを一つの FD、授業方法の改善の目標として取り組んできて、具体的な数値はまだ出せませんが、少なくともこの 3 年間での授業外学習時間は全体としては向上してきました。

話をもとに戻しますが、で、今回の調査では、GCP 学生は 1 日の平均学習時間が 6.6 時間となったのに対し、一般学生が 2.6 時間ということで、明らかな有意差が見られます。ただ、この一般学生の 2.6 時間という数値も、全体平均からすると高くなっています。ある学部の一つの別のプログラムの学生が入っていたりしたものですから多少高めに出っていますが、やはり 1 日にすると 2 時間弱というところが全体的な平均ではないかと思っていますので、GCP 学生の 6.6 時間というのは、かなりの時間、学習に取り組んでいると思います (スライド No.13 参照)。

また、「学部外に励まし合い、相談する人がいる」という質問に対しては、GCP 学生はほぼ全員が「いる」と答えていて (96.2%)、「いない」と答えた 1 名がちょっと気になるのですが、基本は「いる」ということで、当初の理念どおり、学部横断の多様性を重視したことが一つ裏付けられているのではないかと感じています。一般学生の場合は「いない」人の方がはるかに多いということも明らかになりました (スライド No.14 参照)。

漏れを避けるために、「大学内外に励まし合い、相談する人がいないかどうか」という質問もしています。GCP 学生は全員「いる」という結果です。また、一般学生との違いも見えてきています (スライド No.15 参照)。

これらの調査を通して、一つは、授業外学習時間の 1 日平均は GCP 学生が 4 時間ほど多いということです。また、特に学部外に励まし合い、相談する人がいる学生については一般学生の 2 倍以上で、設置趣旨にかなない、学部を越えた学生同士の勉学上の触発、励まし合いがあります。また、GCP 学生の授業外学習の場所は GCP ラウンジと GCP ゼミ室だという結果が出てきています。(スライド No.16 参照)

今回の調査も含めた結論です。いかに学内に学習コミュニティを作るかということをテーマとしていた場合、一つは教員サイドの GCP 授業での多数の課題提示、そして授業外での学習を想定した授業の実施が重要と位置づけられます。また、学生については、勉学に取り組む上で触発し合える仲間がいるということ、そして、環境的には GCP ラウンジ、ゼミ室という場があり、そこには常時教員も常駐してアドバイスをを行っていることが学習コミュニティの形成に寄与していると考えられます。こういった 3 つの要素の相乗効果で学生の学習時間を上げているものと見ています。やはり個人の学習があつてこそ初めて学びが完結すると考えていますので、こういった一つのツール、環境も非常に大事であることを感じています。あの場の雰囲気は、初等・中等教育課程によく見られる、先生がいて、その周りに生徒がいるような「クラス」に似た状況がありますが、学生同士で、また必要に応じて教員に質問しながら勉強中心の学生生活を彼らは送りつつあります。

これは先哲や偉人の言葉ではないのですが、「自分が課題をしないと仲間 (GCP 学生) の足を引っ張ってしまう。みんなが頑張っているから私も頑張ろうという気持ちにさせてくれる」。これはセメスター終了時のラップアップミ

ーティングなども行い、いろいろな学生が1年間の感想を言っていました、その中の言葉であり、こちらが意図したGCPとしての在り方が象徴的に表現されていると思いましたので、掲載しました。このように仲間同士で啓発しながら勉強に取り組むということを展開しています。

最終的には学内にいろいろなくくりはあるかと思いますが、いかに「ラーニング・コミュニティ」を創出するか。そういったことを今後もテーマとして取り組んでいきたいと思っています。（スライド No.17 参照）

経済学部の中にも英語で経済学を学ぶインターナショナル・プログラムがありますが、そこもやはりいろいろな個別のグループを作り、学生同士で声をかけ合いながら勉強に取り組んでいるということもありますので、学習コミュニティをいかに創出するかということが大事かと考えています。これが今までの説明のイメージとなります（スライド No.18 参照）。

また、このGCP自体もラーニングアウトカムズ把握の試みを進めています。プログラム科目のカリキュラムチェックリストを作成したり、英語や社会システム・ソリューションでは外部テストを用いての成果の比較、また、大学全体として学生調査を導入していますが、それとは別のGCP生独自の学生調査も取り入れています。（スライド No.19 参照）

例えばその中で英語の成果事例としては、4月にGCP学生にTOEFLの模試を行ったところ、平均点が481点でした。12月にTOEFL-ITPを行ったところ、平均点が546点ということで、4月より平均点が65点上昇しています。また、500点以上の割合が4月が22%に対して第2セメスターでは94%まで上昇しており、かなりの成果が見られます（スライド No.20-21 参照）。

社会システム・ソリューションでもSATのMathの練習問題を利用してプレポストでテストを行いました、9月と1月の比較では正解数が明らかに向上していました。特に中・低位層の学生がかなり減ってきて、全体としての平均点も伸びているという成果を把握しています（スライド No.22 参照）。

これは通常の授業アンケートの一つの質問項目ですが、「教員に質問するなど、意欲的に学習しようと心がけたかどうか」を全学の学生に質問しています。GCP科目（GCP学生）は「心がけた」「ほぼ心がけた」が約88%、その他の科目のほとんどの多くの学生は42%ということでダブルスコアの違いが出ており、GCP科目だけではなく、それ以外のさまざまな履修科目の勉学にしっかりと挑戦しているということが出ています。この2010年後期のGCP生のGPAも、32名中14名が4.5以上で、全体としての成績の伸びが明らかに見られています。（スライド No.23 参照）

また、学内外でもさまざまなところでGCP学生の勉学に取り組む姿勢が評価されつつあります。例えば、昨年11月に広島でノーベル平和賞の受賞者世界サミットが行われましたが、ここに事務局よりオファーがあり、5名のGCP学生が参加しました。会期中は全部英語でアメリカの学生と議論し、共同声明文を起草したり、また、受賞者に質問したりするなど、さまざまなことに取り組んで帰ってきました。今でもこれらの学生はアメリカの学生と交信もしています。（スライド No.24 参照）

授業以外でも、さまざまな国際機関・海外諸機関で働く方々との懇談会など、いろいろな触発する場を設けています。（スライド No.25 参照）

プログラムとしてのさまざまな課題はあります。特に学生生活（クラブ活動、アルバイト、通学時間、学生寮など）と、プログラムが必要とする学習時間の兼ね合いなどには学生も悩みながら頑張っていますが、こういったことも大きな課題となっています。また、ラーニングアウトカムズの学内のパイロットケースとして取り組んでもいます。何よりも、当初に想定した進路にある程度の学生さんが進まないこのプログラムの成否が問われますので、1年次

初頭から、とにかく細かく指導しながら取り組んでいるところです。（スライド No.26 参照）

いずれにしても、今年はこのプログラムの2期生が入ってきますので、さらに学習を中心とした学生生活に移行し、学生が希望する進路に進めるようしっかりとバックアップするつもりです。どうもありがとうございました（拍手）。

（松下） どうもありがとうございました。それでは、今のご報告に対して質問はありませんでしょうか。どうぞ。

（フロア1） 信州大学のYと申します。このプログラムでお示されたような成果が出ていることは確かにすごいと思うのですが、一つお聞きしたいのは、こういう形で特別な選抜をして、素養が良くてこういう成果が出たのか、あるいはこのプログラムの教育方法が良くて出たのか。それは検証されているのでしょうか。

（澤登） そこまで具体的には取り組んでいませんけれども、恐らく両面あるだろうと考えています。

（フロア1） アンケートなどの調査結果を出すのだったら、普通の選抜のうちの入試の上位のところと比較されるのか、そういうことをしてみると、その辺が分かるかもしれないと思います。

（澤登） 学生調査でも同じような質問も設けていまして、その辺も含めて比較したいと今、準備しています。GCPの第2次選抜にもれた学生集団も継続的に把握しており、その集団とGCP学生とのGPAとの比較を実施しています。

（松下） ほかの質問はぜひ質問用紙に書いていただければと思います。

一つだけ私の方からも確認させていただきたいのですが、スライド13にあった授業外学習時間は1日当たりの平均なのですね。1日6.6時間ということは、授業時間はどの程度あるのでしょうか。

（澤登） 学部にもよりますし、またCAP制も導入していますので、平均すると、1日2コマ、3コマぐらいでしょうか。

（松下） そうですか。そうしたら、非常に多くの時間を勉強にあてているということですね。先ほどの溝上さんの調査では、1週間で5時間以上というのが比較的よく学んでいる学生の目安ですね。びっくりしました。どうもありがとうございました（拍手）。

それでは、ただ今は4時3分くらいでしょうか。今日は予定では5時までとなっていますので、あと1時間程度になってきました。質問に対して報告者から答えていただくというのが、フロアとのやり取りの唯一の機会になると思いますので、ぜひ質問用紙にいろいろお聞きになりたいことや感想などをお書きいただければと思います。

それでは、今から休憩に入ります。4時15分に再開させていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

—休憩—



創価大学

Discover your potential
自らの力を発見

オーナーズ・プログラムの可能性

—学習時間の確保と学習コミュニティの形成—

澤登秀雄（創価大学教務部課長）

第17回大学教育研究フォーラム
＜シンポジウム（報告5）＞
2011年3月17日（@京都大学）



創価大学

「建学の精神」と「ミッション・ステートメント」

「建学の精神」

- ① 人間教育の最高学府たれ
- ② 新しい大文化建設の揺籃たれ
- ③ 人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ



開学40周年

「ミッション・ステートメント」（輩出する人材像）

創価大学は、人類が直面する個々の問題に真摯に取り組み、智慧を発揮していき創造的人間を育成します。

求められるべきは、真の「教養」をそなえた地球市民としての創造的人間にほかなりません。

創造的人間とは、刻々と変化する厳しい現実と挑戦し、知識を生かしながら、問題を解決するために自在に智慧を発揮していく人間です。（抜粋）

⇒ 国際交流の推進（45カ国・地域123大学と学術交流協定）
北京事務所の開設、ワールドランゲージセンター設置
多言語語学教育（18言語）、アメリカ創価大学開学（2001年）



創価大学

オーナーズ・プログラム導入の背景

- 学生の学力の多様化
＝入学試験の多様化
＝受験生・入学生の広範な学力層
- 多様化する学生の主に中位層中心の政策
＝基礎演習、アカデミックアドバイザー制度
学生ポートフォリオ（目標設定、タイムマネジメント）
数学力向上など多彩な学習支援キャンペーン・・・
- リーダーシップや問題解決能力を有する学生の社会的ニーズの増大



上位層をさらに伸ばすオーナーズ・プログラムの必要性



創価大学

「グローバル・シティズンシップ・プログラム」開設

- ◆ 開設：2010年4月 ※約3年間の検討期間
- ◆ 目的：建学の精神のさらなる具現化
成績上位層を伸ばす（＝プログラム≠優等学位）
国際的企業、国際協力機関、海外大学院等を目指す学生を支援
- ◆ 選抜方法：2段階で【30名】を選抜
 - (1) 4入試（公募推薦、創価高校推薦、センター、一般）の合格者から、入試得点とエントリーシートで第1次選抜
 - (2) 第2次選抜
 - ① 小論文試験
 - ② 英語ライティング試験（2011年度選抜から実施）
 - ③ 面接試験
 - ④ グループディスカッション の総合評価

＋ ⑤ 入学直後全新生に実施するTOEIC-IP、プレイスメントテスト（日本語・数学）の得点を加味

※2010年度選抜
志願者：294名 第1次選抜合格者：75名 【最終合格者：32名】



創価大学

「グローバル・シティズンシップ・プログラム」開設

—プログラム5つの特徴—

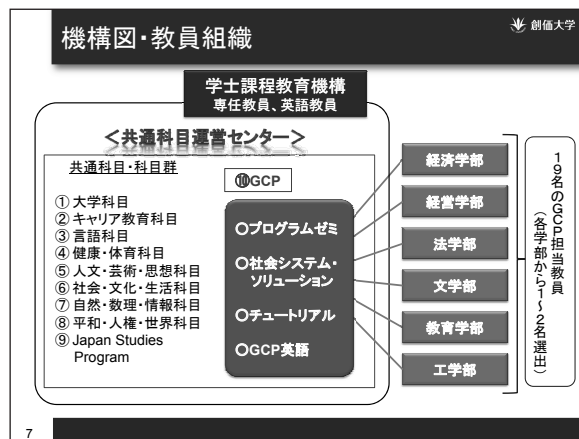
- ① それぞれの学部・に所属したまま参加できる全学部横断型
- ② 徹底した英語教育と海外研修で国際教養人を育成
－ GCP奨学金給付により、全員が海外短期研修を体験－
- ③ 社会システムを読み解く力・数理分析力をトレーニング
- ④ 少人数構成の独自ゼミにより多角的な能力を育成
－ リーダーシップ、アカデミックスキル、プロブレムソリューション、プレゼンテーション能力を養成－
- ⑤ 4年間にわたる少人数制によるきめ細かい指導



創価大学

プログラムの開設授業

科目	各セメスター修得 単位数	開講期	プログラム修了に 必要な単位数
◆ チュートリアル	1単位	1～4年	8単位
教員1人あたり学生5～10名。特に3年次からは進路に合わせて適任教員を配置			
◆ プログラムゼミ	2単位	1～2年	8単位
キャリア&リーダーシップ、課題発見・解決型、テーマ設定による共同研究など			
◆ 社会システム・ソリューション	2単位	1年後期 2年前期	4単位
データ分析能力の育成、課題発見・解決へのオペレーションズ・リサーチなど			
◆ GCP英語	4単位	1～2年	16単位
週4回、レベル別2クラス設置、ネイティブ教員による全て英語での授業			
1年次春休みを利用して2週間の海外短期研修（奨学金支給）			
プログラム修了に必要な総単位数			36単位



授業外学習時間の確保(1)

創価大学

GCP授業での教員から課題提示—授業外学習を想定した授業設計—

「GCP英語」
リスニングとそのノート作成、教材の音読・速読、文章・サマリ作成、プレゼンテーションの準備など、毎日4時間程度を要する難度の高い課題を提示。

「社会システム・ソリューション」
予・復習と宿題に週5～10時間の授業外学習を想定、宿題を中心に英語の問題を提示し、英語で数的処理能力向上を目指した。宿題解答例もコメントを付けて学生個別に返却。

「プログラムゼミ」
ゼミⅠ:文献調査を前提としたレポート3回/リーダーシップの文献講読、同ワークシート作成等
ゼミⅡ:グループごとに研究テーマとそれに対する研究分担を決め、各自が毎週リサーチ・ジャーナルを提出(所要週3～5時間)。かつグループでそれに対する討議を毎週行い(所要週2～3時間)、ゼミに臨む。

「チュートリアル」
個別チュートリアルによる課題教材の予習と発表、レポート作成(1回)。
GCP授業だけでなく、所属学部の専門科目、共通科目の勉強にもしっかり取り組むよう、指導している。

11

授業外学習時間の確保(2)

創価大学

■授業外学習時間調査■

1. 調査対象(1年生)
GCP学生、一般学生(複数の科目で実施)

2. 調査項目

1) 授業外学習時間
2010年11月末から12月中旬までの14日間(土日を2回ずつ含む)の学習時間を30分ごとに記載

2) 学生間の勉強の励まし、相談
勉強の励ましや相談できる友人がいるかどうかを、複数回答により調査

12

授業外学習時間の確保(3)

創価大学

3. 調査結果

有効回答数: GCP学生 26名
一般学生 53名

1) 授業外学習時間(1日あたり平均)

分類	N	平均値(時間)	標準偏差
GCP学生	26	6.6	1.66
一般学生	53	2.6	1.97

平均の差の検定(t検定): $p < 0.01$

一般学生学部別内訳

学部	N	平均値(時間)	学部	N	平均値(時間)
経済学部	9	4.3	文学部	20	2.4
経営学部	7	2.2	教育学部	5	2.9
法学部	10	1.8	工学部	3	3.1

13

授業外学習時間の確保(4)

創価大学

2) 学生間の勉強の励まし、相談

a) 同じ学部内に励まし合い、相談する人がいる。

分類	いる	いない	計
GCP学生	88.5%(23)	11.5%(3)	100%(26)
一般学生	64.2%(34)	35.8%(19)	100%(53)

割合の差の検定(χ^2 検定) $p < 0.05$

b) 学部外に励まし合い、相談する人がいる。

分類	いる	いない	計
GCP学生	96.2%(25)	3.8%(1)	100%(26)
一般学生	41.5%(22)	58.5%(31)	100%(53)

割合の差の検定(χ^2 検定) $p < 0.01$

14

授業外学習時間の確保(5)

創価大学

c) 大学外に励まし合い、相談する人がいる。

分類	いる	いない	計
GCP学生	23.1%(6)	76.9%(20)	100%(26)
一般学生	20.8%(11)	79.2%(42)	100%(53)

割合の差の検定(χ^2 検定) $p < 0.81$

d) 大学内外に励まし合い、相談する人がいない。

分類	いない	いる	計
GCP学生	0%(0)	100%(26)	100%(26)
一般学生	17.0%(9)	83.0%(44)	100%(53)

割合の差の検定(χ^2 検定) $p < 0.05$

15

授業外学習時間の確保(6)

創価大学

4. 考察

ア: 授業外学習時間の1日平均はGCP学生が4時間多い。

イ: 履修単位はGCP学生: 15.4単位、一般学生: 13単位。

ウ: GCP学生は履修単位も多いが、GCP授業で多くの課題が提示されている。また、共通科目や専門科目の学習にも積極的に取り組むよう指導している。

エ: GCP学生は、一般学生に比べ、学部内・外において触発し合える仲間が多い。

オ: 特に学部外は、一般学生の2倍以上。設置趣旨にかなない、学部を越えた学生同士の勉学上の触発、励まし合いがある。

カ: 大学内・外に励まし合える友人がいない学生の割合は、GCPは0%に対して、一般学生は17%。

キ: GCP学生の、授業外学習の場所はGCPラウンジ、GCPゼミ室。

16

授業外学習時間の確保(7)

創価大学

5. 結論 「学習コミュニティ」へのアプローチ

(教員) GCP授業での多数の課題提示(授業外学習想定授業)

(学生) 勉学に取り組む上で、触発し励まし合える仲間

(環境) GCPラウンジ、GCPゼミ室

※GCP教員も常駐し適宜アドバイス

⇒ 初等・中等教育課程に見られた「クラス」に似た状況

⇒ 相乗効果で、学習意欲の維持・向上

＝授業外学習時間の増加＝勉学中心の学生生活への移行

「自分が課題をしないと仲間(GCP学生)の足を引っ張ってしまう。皆が頑張っているから私も頑張ろう、という気持ちにさせてくれる」

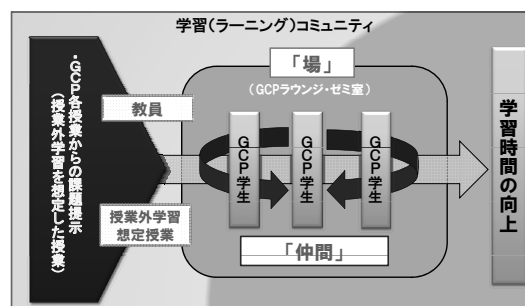
(GCP学生の言葉)

∴学内にいかに「学習(ラーニング)コミュニティ」を創出するか

17

イメージ: 学習(ラーニング)コミュニティ

創価大学



18

プログラムの教育効果の測定

創価大学

ラーニングアウトカムズ把握の試み

- ① プログラムのラーニングアウトカムズと科目到達目標の明示
 - ◆ プログラム科目のカリキュラムチェックリスト作成
- ② 英語科目における外部テスト得点比較(別掲)
- ③ 社会システム・ソリューションのプレ・ポストテストによる比較
 - ◆ SATのMathに則した、確率および図・グラフの見方等(同)
- ④ 「学生調査」の実施
 - ◆ 学生の意識・態度の変化の把握
 - ◆ プログラムの目標等の到達度把握
 - ◆ 1年次4月と、1年／2年終了時、卒業時に実施
 - ※ パネル調査により成長(変化)を把握

19

英語科目の成果事例(1)

創価大学

GCP英語の到達目標

- ◆ 即戦力の読解力、ライティング、リスニング、スピーキング能力
- ◆ 欧米大学院レベルの論理的思考力、ディスカッション・プレゼンテーション能力

英語成果の指標

- ◆ スピーキング、ライティング能力
 - ⇒ プログラム開始直後、1年終了時、2年終了時のレベルを指標に沿って評価
- ◆ 外部テスト指標(TOEFL-PBT)
 - ⇒ セメスター開始時、中間、期末評価に採用

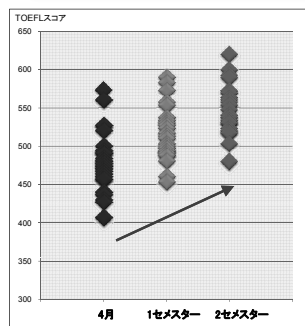
英語スコアの伸び

- ◆ TOEFLスコア(次頁)
- ◆ 語学力向上学生表彰 GCP学生5名受賞

20

英語科目の成果事例(2)

創価大学



21

社会システム・ソリューションの成果事例

創価大学

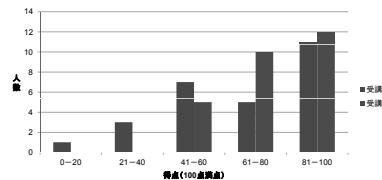
2010年9月: プレテスト(プレ)

SATのMathの練習問題を利用し、確率及び図・グラフの見方をテスト。平均70点。出来る学生とそうでない学生の2極化が顕著。

2011年1月: プレテストと同レベルの問題を出題(ポスト)

平均81.5点で、プレテストから11.5点の伸び。プレテストでは2極化していたが、分布の山が右(高得点)に移行。とくにプレテスト下位・中位層の学生の成績が著しく伸びた。

基礎的な数値処理能力の変化



22

GCPの学内・外への波及(1)

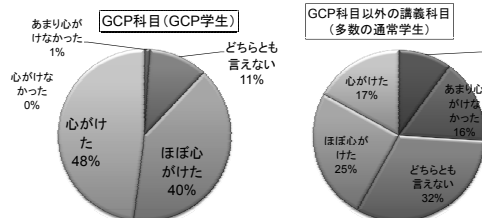
創価大学

① GCP学生の勉学への姿勢

「授業アンケート」(各セメスターで実施/2010年度前期結果: 抜粋)

設問1-(4)「教員に質問するなど意欲的に学習しようと思えましたか?」

「心がけた」「ほぼ心がけた」→GCP科目 88% その他の科目 42%



23

GCPの学内・外への波及(2)

創価大学

② 学生寮内でのGCP学生の勉学に取り組む姿勢

32名中、寮生14名(男子11名、女子3名)

共同生活の中でのGCP以外の学生からの声

③ 「ノーベル平和賞受賞者世界サミット」参加

(2010年11月12日～14日/ @広島市/ 世界各国から参加)

- ・運営事務局より創価大学にオファー、GCP学生5名が参加。
- ・会期中の会話はすべて英語。同賞受賞者に英語で質問する。
- ・アメリカ学生と議論を重ね、サミット共同声明文を起草し、発表。
- ・現在も交流が続いている。
- ・これらの活躍が地元紙にも掲載された。

24

授業以外の取り組み



- 海外諸機関で働く大学OB・OGとの懇談会
 - ◆ 「アジア開発銀行」職員（2010年5月12日）
 - ◆ 「国連開発計画、外務省等」勤務経験者（同6月16日）
 - ◆ 「国連難民高等弁務官東京事務所」職員（同7月3日）
 - ◆ 「アジア開発銀行」リサーチフェロー（同8月30日）
 - ◆ 「UNICEFジブチ事務所」職員（同11月26日）
- 理事長、学長との懇談会（2010年5月、2011年2月実施）
- 海外からの来客対応（英語によるガイド）
- GCPラウンジで、休み時間や昼休み、課外を利用した個別指導（専任教員による） ⇄ チュートリアルとは別
- 学生同士のメーリングリスト

25

課題



- ① 各学部カリキュラムとプログラム
 - ◆ 履修科目の多さ（プログラム科目は履修制限外）
 - ◆ 各学部の専門科目との整合（プログラム到達目標－学士カー進路）
 - ◆ 3～4年次のプログラム（チュートリアルのみ）による進路別の出口管理
- ② 学生生活（クラブ活動、アルバイト、通学時間、学生寮）とプログラム
 - ◆ プログラムでは絶対的な学習時間の確保が必須
- ④ 教育効果測定への模索
 - ◆ ラーニングアウトカムズ把握の学内パイロットケースとして
- ⑤ 学生の進路決定へのフォローアップ
 - ◆ 1年次初頭からのフォロー、プログラムの評価に直結

26

ありがとうございました。



Hideo Sawanobori hsawa@soka.ac.jp

27